

# 伝え合う力を育てる授業づくり

～補習校でICTを活用した学び合い学習～

カンタベリー補習授業校

c/o Ilam School, 66 Ilam Road, Ilam, Christchurch, New Zealand

<http://www.cjssnz.org>

## 1. 研究の背景

本校は文部科学省認定在外教育施設であり、学習指導要領に基づいて編集された教科書を、日本語に基づいて授業を行う補習授業校である。国語科指導時間数は、国内の指導時間数の半分にも満たない状況下であるが、基礎基本である知識、技能の習得に力を入れてきた。補習授業校の教育環境は大変厳しいもので、教室を土曜日のみ借用して授業を行うため、教員は自作の教材を準備して子どもたちの学習理解を図ってきた。プロジェクターは、借用教室の全てに設置されていたが、授業に使用することはなかった。担任の中には、子どもたちに見せたい教材があつた場合、担任のノートパソコンを用いて視聴させる状況であつた。このように、学校全体でICTを取り入れ、学習者の学習意欲を高める学習展開の工夫は、大変遅れていた。さらに、補習授業校は限られた指導時間数であり、学習展開は知識、技能の注入に偏りやすく、学習者の学ぶ意欲を高め、学び合い学習を通して思考力、判断力、表現力を向上させ、「確かな学力」の育成を意識した学習展開といえるものではなかった。

そこで、国語科学力差の克服と国語力の向上のため、平成26年度校内研究テーマ「自ら考え、学び合う子どもをめざして～伝え合う力を育てる国語科の授業～」と設定し、全教員で授業実践研究に取り組み、研究協議を重ねてきた。その成果物として研究紀要にまとめ、研究の方向性と授業実践の継続性を確認した。なお、平成26年度校内研究は海外子女教育振興財団「教育活動等援助事業」として支援を受けることになった。

そして、本校は平成27年度パナソニック教育財団「第41回実践研究」助成校として、研究課題「伝え合う力を育てる授業づくり～補習校でICTを活用した学び合い学習～」のもと、全教職員で授業研究と研究協議に取り組んできた。

## 2. 研究の目的

国語科学力差の克服と国語力の向上のため、児童・生徒の学習意欲を引き出し、自らが進んで考え、友達の意見や考えをよく聞き、自らの考えを深めさせる学習展開の工夫が大切であることに気づき、授業実践を重ねてきた。子どもたちが、自らの考えを級友に分かりやすく伝え、お互いに学びの広がりや深まりに気づき、学び合う喜びを感じさせる授業づくりが、今年度の課題となっていた。

上述したねらいを具体的に実践するため、以下の取り組みを行った。

- (1) 補習授業校の学びがより豊かなものになるよう、ICTを活用して児童・生徒が自ら進んで学習に取り組み、互いに学び合いながら、情報活用を通して思考力、判断力、表現力を育てる授業実践を行う。
- (2) 全教員は研究組織に基づいて、各学年で「めざす児童・生徒像」、並びに「情報活用を通して学び合いを深める学習展開」について話し合いをもち、共通理解を図る。それを受けて全体で協議を行い、授業実践や授業研究協議を深化させていく。

### 3. 研究の方法

本校の研究テーマの柱は「子どもたちの学習意欲を高める手立てとしてICT活用」であり、「ICTを活用して学び合い学習の推進」である。また、学び合い学習を効果的に行うため、学級集団としての「学習規律」の徹底を、全教員で再確認し合うことにした。

授業改善の具体的方策としては、昨年度に引き続き指導案に基づいて授業を公開した。公開授業は全て映像に収め、その後の研究協議会の資料として役立てた。研究協議会はワークショップ形式で、2グループに分かれ、研究テーマの柱について話し合った。各教員は、事前に公開授業の映像を視聴しながら、子どもたちや教員の工夫していた点や改善すべき点等について、予め付箋に記載しておくことにした。研究協議会では、その付箋を座標軸ボードに貼り付け、教員同士の学び合いの資料とした。また、研究協議会では、予め小グループで話し合った内容を報告する発表者と、小グループの司会者を決めておくことにした。

本校は土曜日のみ現地校の教室を借用しているため、ICTの活用には制約がある。電子黒板は、補習校事務所からの移動は困難であり、使用することはできない。しかし、現地校の全教室にはプロジェクターが設置されており、書画カメラをノートパソコンに接合し、プロジェクターで映し出すことにした。そのため、書画カメラは、小・中学部全学級の授業研究で利用できるようになった。デジタル教科書は、ノートパソコンにダウンロードして操作することにした。なお、本校は補習授業校であり、国語科指導時間は国内の半分にも満たない状況であり、小1、小4の学年でデジタル教科書を活用する単元を限定し、授業実践を行うことにした。タブレット端末5台を用いての研究授業は、中学部とした。国語科授業では2～3人で1台の利用となり、少人数で考えや感想を出し合い、それを記入したものを学級全員や小グループ内で読み合い、話し合いながら互いの考えを深めるのに最適と考えた。また、学級全体の意見交流では、授業者のノートパソコンに学習者の記入した意見や感想が瞬時に掲載され、授業者はそれをすぐに読むことで、学習者の考えを引き出し、他者の考えと共有させ、学びの質を追究しながら学級全体の考える力を高め、学び合い学習を推進するのに好都合と考えた。

### 4. 研究の実践内容

#### (1) デジタル教科書を活用した授業研究の事例

① 小1「おむすびころりん」の単元での実践授業である。デジタル教科書を用いて、本文を場所や登場人物に着目させて三つのまとまりに分ける。そして、挿絵を提示しながら、三つに分けたことを確かめる授業であった。5時間扱いの本単元であるが、本校は3時間で行った。研究協議会での感想や課題について、お互いに共有したものを列挙する。

ア 授業者は、PC操作、学習者の反応や様子の把握、指導案に基づいた学習の進み具合の三点に気を配る必要があり、授業者は普段より大変であった。

- イ 電子黒板がないため、学習者はスクリーンを見たり、教師の方を見たり、教科書を見たりと見る方向が定まらず、どこを見るのか迷っていた。(学習者を習慣付ける指導が必要となっている)
- ウ デジタル教科書は学習者全員で挿絵を見ることができ、興味付けを図るのに最適である。小づち、小判等を画面に映し、用語を理解しやすくさせている。
- エ 電子黒板がない状態でデジタル教科書を活用するには、どの領域で活用することが最適か、検討する必要がある。《改善提案》(デジタル教科書は、挿絵等で一斉提示を行う場面に利用できる。音声は、CDを用いる。)

② 小4「カンジー博士の漢字しりとり」の単元での実践授業である。デジタル教科書を用いて、「漢字しりとり」のルールを知って、漢字を正しく読んだり書いたりできるようにする。また、小グループで助け合いながら、既習漢字を正しく使えるように取り組ませる授業実践である。2時間扱いの本単元は、本校も2時間で行った。研究協議会での感想や課題について、お互いに共有したものを列挙する。

ア デジタル教科書の様々な機能や操作方法について、授業者は充分習得したうえで活用していた。そのため、学習者の反応を観察しながら、落ち着いて漢字しりとりルールを説明していた。



イ 電子黒板がないため、ホワイトボードに画像を映し、直接マジックで漢字の読み仮名を記入した。

ウ グループ学習を通して学習者の学習意欲を高めていた。

エ 補習校の授業は、国内の2倍を超える速さで授業を進めるため、指示や説明が多く講義形式の授業になりやすい。しかし、ICTを使うことで、一斉提示場面で学習者の学習意欲を引き出し、気付いたことや考えたことを発表させた。また、小グループで作業させた記録は、ICTやマグネットシートを活用して発表させることができた。友だちの意見や考えをよく聞くことで、学び合い学習を推進することができた。

## (2) 書画カメラ・プロジェクターを活用した授業研究の事例 (一部のみ)

① 小1「すきなこと、なあに」の単元での授業実践である。書画カメラを利用して、基本的な文章の構成を学び、マス目用紙の使い方を確認しながら「すきなこと」と「その理由」が正しく書けるよう、効果的な活用を行った。正しく書いたものを提示し、伝え合うことを通して学び合いの学習を推進した。4時間扱いの本単元は、本校では1時間で行った。研究協議会での感想や課題について、お互いに共有したものを列挙する。

ア 書画カメラを用いて、学習者にワークシートの使い方を実際に書きながら説明した。

イ 書画カメラを用いて、指導した内容(名前、主語、述語の関係、句読点、～することが好きです。～からです。)が正しく書かれているか、友達の書いたワークシートをもとに学習者全員で確認した。

ウ 書画カメラを用いて、どんな箇所が良く書けているか、互いの感想を発表させ、学び合い学習に効果的であることが分かる。

エ 書く指導では、ICT を効果的に使うことで学習者の意欲を高め、知識、技能を理解させ、学び合い学習にも効果をもたらすことが分かる。

- ② 小5「天気を予想する」の単元での授業実践である。書画カメラを用いて、筆者が表・写真・図・グラフを用いて説明した意図や、その効果についてまとめる場面で、学習意欲を高めながら小グループで話し合ったことを発表し、互いの発表を通して学び合い学習を追究した実践例である。6時間扱いの本単元は、本校では3時間で行った。研究協議会での感想や課題について、お互いに共有したものを列挙する。

ア 授業者は、教科書を書画カメラで映し出し、記載されている箇所に線を引き、学習内容の共通化を図った。

イ 小グループごとに各資料の役割と特徴を話し合わせ、その内容を紙に書かせた。小グループごとに書画カメラを用いて発表させた。

ウ 学習者は、教科書の記述内容が十分理解できるよう家庭で音読を重ね、分からない言葉等については事前に意味を調べ、話し合い活動がより活発なものとなった。学習のまとめでは、書画カメラを有効に活用した。

エ 学習規律を大切にし、分かりやすい発表を心がけさせ、学び合い学習を推進した。

- ③ 中3「推敲して、文章を磨こう」の単元での授業実践である。パワーポイントを作成して、自分が推敲した部分と他人が推敲した部分を見比べて意見を述べ合うことで、知識・技能の習得を図りながら思考力を磨く実践例である。1時間扱いの本単元は、本校でも1時間で行った。研究協議会での感想や課題について、お互いに共有したものを列挙する。

ア 補習校には電子黒板がないため、パワーポイントで作成した画像をホワイトボードに映し出した。(現地校のプロジェクターとスクリーンでは、推敲の際、画像に手が届かず、記入も不可能である。)(推敲の際、記入が困難なため、ホワイトボードの高さを調節し、固定できる設備が必要である。)

イ 課題文は、ワードに打ち直した。(行間を開けて、推敲の際に記入しやすくした。)

ウ ICTを学習展開のどの場面で、どのように使用したら効果的か考えていく。《問題提起として重要》

エ 思考力を磨くための学習展開例について(小グループで意見を出し、発表⇒⇒違った意見や考えも出るが、全体で正しい答えを導き出す

### (3) タブレット端末を活用した授業研究の事例

- ① 中2「走れメロス」の単元での授業実践である。タブレット5台とノートパソコン(グーグルドキュメント)1台を用いて、学び合い学習を通してメロスの行動や考え方について、自らの考えを持たせる授業実践を行った。各グループの話し合う内容は、タブレットに見出しを箇条書きで記入し、全グループと授業者がこの情報を共有して学習展開を図った。自分と他者との意見や感想について、共感できるところと共感できないところについての根拠を明確にしながら、自らの思考力を深めさせる実践例である。7時間扱いの本単元は、本校では4時間で行った。研究協議会での感想や課



題について、お互いに共有したものを列挙する。

ア タブレット5台とノートパソコンを用いて、双方向の授業実践に取り組んだ。生徒に学習への関心・意欲を持たせ、場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、グループ内での意見や感想をタブレットに記入し、それをグループ間で交流することができた。

イ タブレットの利用により、各グループが何を書いているのか明確で分かりやすく、比較しやすい。情報の共有（学習者間、学習者と授業者間）を行うことができ、時間短縮が図りやすい。また、タブレットの入力文章を、授業者の手元で確認し、学習展開に合わせて各グループの意見や感想を求め、相互の考えを練り合わせるのに好都合である。

ウ 借用校を利用した授業実践のため、モバイル wifi の利用環境が安定せず、授業者と学習者の接続がうまくいかない事例もあった。現地校の wifi を授業日に利用できるよう、ICT 活用の環境を一層整える必要がある。

エ 今後のタブレット活用授業は、国語では縦書きソフトの導入を図り、数学(算数)や社会の教科では調べ学習に際して資料収集やカメラ機能の利活用について、実践事例を重ねていきたい。

## 5. 研究の成果

補習授業校を取り巻く教育環境は大変厳しいものであるが、海外で生活する児童・生徒にとっては、国語（日本語）力の育成は急務である。そのため、児童・生徒の学習意欲を高め、自らの気付きや考えを他者に伝えることで自らの考えを深め、広げることで思考力、判断力、表現力を磨き、集団としての学びを高め、学び合い学習をさらに前へ進めることを目指した。

最初は、ICT に対し戸惑いを見せる教員もおり、ICT への反応は各教員で違っていた。そのため、書画カメラ、タブレット端末、ノートパソコン等の ICT 器材が活用できる段階で、機器の使い方や保管・管理について校内研修を行った。ICT 機器に長けている事務主事が各教員のサポート役を果たし、本研究の推進に大きな役割を果たした。全教職員で、研究計画に基づき授業実践・研究協議を進めた。各教員は授業実践者として、「ICT の活用場面を学習展開のどこにするか。なぜ、その場面で ICT の活用なのか。」等について、研究を重ねた。先行授業実践のビデオを視聴しながら、授業展開の構想を描き、児童・生徒の学習意欲を高める教材として、パワーポイントを作成する教員も現れた。ICT の活用を学校全体で取り組むことにより、各借用教室の課題が予め分かり、その課題の克服策を教員が協力して見つけることもできた。初めて書画カメラを活用して授業実践を行った教員が、「ICT を活用することで学習展開の工夫に幅が広がり、子どもの学習意欲を高めることが分かり、今後も活用していきたい。」と述べていたことは、とても印象的であった。各教員が ICT を活用して学び合い学習を追究した本実践研究は、継続的な授業実践とその後の研究協議の場で熱心な話し合いを行い、教員がともに学び合う場でもあった。

全教職員で取り組んだ2年間（2014・2015年度）の国語科授業研究は、児童・生徒の国語学習意識にどのような変化を示しているか簡単に報告する。（同じ設問形式、数値は全校の平均）

【2013年10月調査⇒2015年10月調査・・・プラス指向を示した増加の割合】

- ・国語の学習がすき・・・プラス 9.5%
- ・読んで考え想像するのが楽しい・・・プラス 6.0%
- ・漢字の勉強が楽しい・・・プラス 5.9%
- ・発表を聞くのが楽しい・・・プラス 4.2%

国語意識調査でプラス指向する児童・生徒の変化は、「国語の学習がすき」が大幅に増加を示している。また、学び合い学習の観点から「発表を聞くのが楽しい」「発表が楽しい」の設問で、プラス指向する児童・生徒の割合は、それぞれ88.0%、83.5%を示している。このことから、ICTを活用した学習展開は、児童・生徒の学習意欲を高めていることが分かる。また、国語（日本語）力の差が大きい学級では、ICTを活用した小グループでの協働学習が、学力の高い児童・生徒を活かし、グループをリードして学び合い学習を進め、学級全体の学力を向上させることが明らかになりつつある。

## 6. 今後の課題・展望

補習授業校で学ぶ子どもたちは、大変厳しい教育環境下におかれている。平日は現地校で学び、週末の土曜日は補習授業校で国語、算数・数学、社会の学習に取り組んでいる。国語（日本語）力の育成は、帰国した際、日本の教育内容に適応するうえで最も重要な教科である。近年、国際結婚家庭が増加しており、補習授業校へ通う児童・生徒の家庭における言語環境を整えることは急務である。さらに、本校の国語科指導時間数は、国内の半分にも満たない状況である。そのため、国語科1コマあたりの学習展開は、国内の2倍を超える速さで進めざるを得ない。補習授業校の教員は、平日は他の仕事に従事しながら事前に授業の準備を済ませておき、土曜日は非常勤講師として学習指導にあたっている。この様に厳しい教育環境の中で、児童・生徒、教員、家庭の三者が支援と連携を図り、「確かな学力」を身に付けるべく懸命に努力を重ねている。

授業実践研究の課題は、学習規律に留意しながら学び合い学習を推進する手立てとして、ICTの活用を他教科にも広げていくことである。学習展開が知識、技能の注的指導に偏るのを防ぐ解決策の一つは、ICTを含む教材・教具を学習展開の中で多面的に活用することである。補習授業校の教員は、お互いの授業を参観する機会がないため、校内研究（授業研究・研究協議会）を通して、お互いの研究授業を観察・評価し、学び合いの中から授業改善の具体策を導き出そうとしている。今後も、授業研究としてICT活用による学び合い学習は、児童・生徒の思考力、判断力、表現力を向上させ「確かな学力」を身につけさせる大切な授業実践である。